

青梅市文化財ニュース

第333号

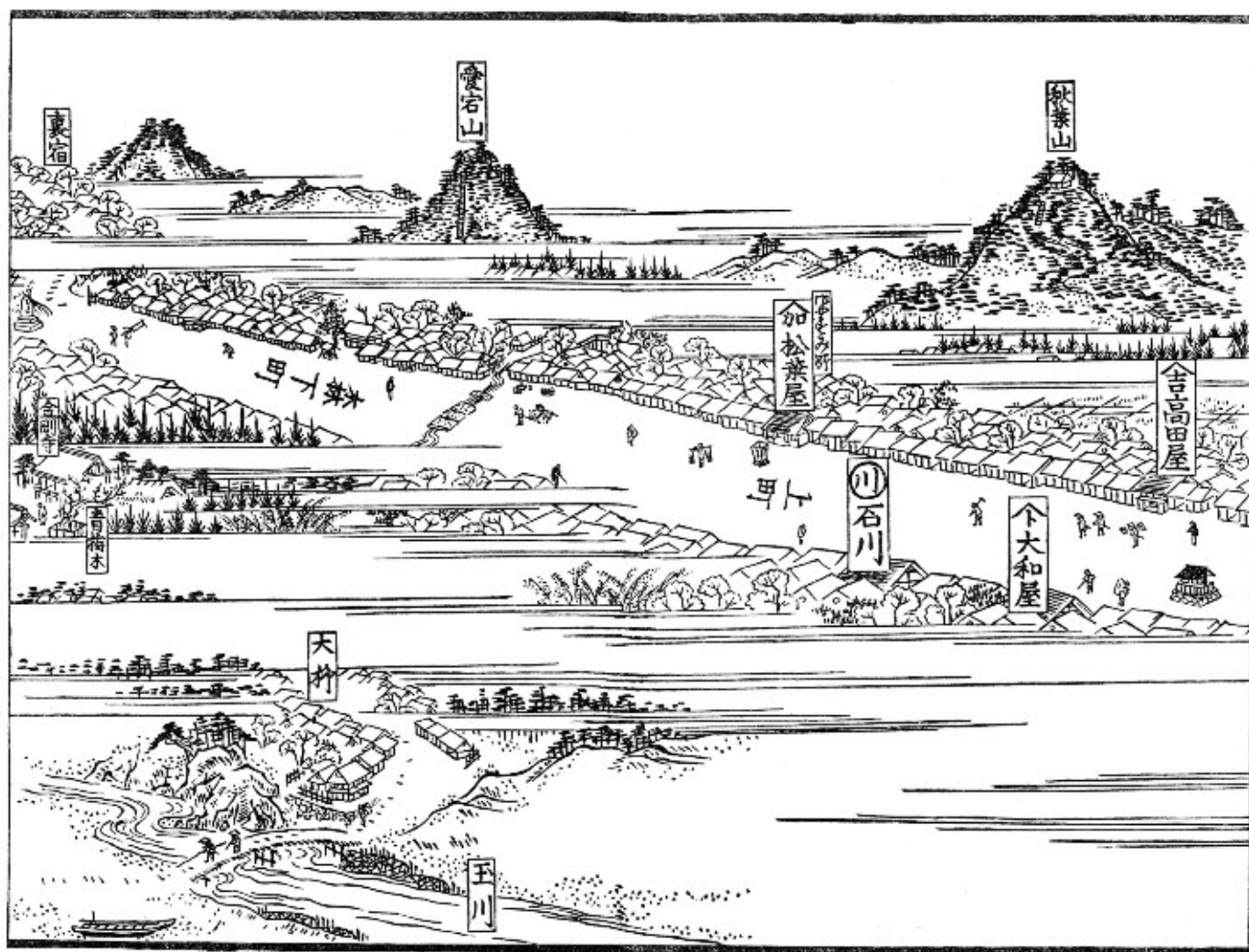
平成27年7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel.0428-23-6859）

江戸時代後期の青梅宿

江戸時代後期の青梅宿の状況を描いた絵図として、天保5（1834）年に書かれた『御嶽菅笠』^{み たけすげ}があります。『御嶽菅笠』は、江戸幕府神道方吉川家の学頭を務めた齋藤義彦の作で、版木は青梅市の有形文化財に指定されています。内容は、新宿追分を出発点とし、そこから田無宿や箱根ヶ崎宿を通り、青梅を経てから武蔵御嶽神社まで、途中の村々を簡単に紹介しながら、風景を描いています。下にある絵図は、その中の一枚です。



描かれている範囲から推定すると、滝ノ上町と千ヶ瀬町の境目の上空から、上町から裏宿付近を見た風景です。限られた紙面内に多くの建物や神社などを描くので、実際の位置からズラしている箇所もあります。例えば、左下にある大柳にある橋は、旧釜の淵公園水泳場の位置にあたりますが、本来であれば紙面の右下に置くべきでしょう。また、左上にある石碑は森下町にある熊野神社に位置していますので、青梅^{あおうめのき}木が植えられている金剛寺は、紙面からはみ出てしまうため右下に移されています。

さて、広い青梅街道の両側には、商店や民家が軒を連ねています。梅岩寺の名称はありませんが、裏山に祀られている秋葉山神社が描かれています。上町と森下町の間には、橋が描かれています。ここは現在、青梅坂下の信号がある場所です。

江戸時代、多くの宿場町では、街道の中央に水路が設けられていました。街道が土のままであるため、道幅が広いと強い風が吹いた場合、土埃が立ちやすく、商品が被害を受けるためです。土埃が立つような状態になると、それに気付いた店員が柄杓^{ひしゃく}で水路の水を掬い、水を撒^まいていたことでしょう。この絵図には橋から先へは描かれていませんが、街道の中央を橋から上町を通して大和屋の方へ延びていたと推定されます。住江町にある白木屋の東側に水路跡が残っていますので、あるいは白木屋の前まで水路が延びていたのかもしれない。

水路を流れる水の水源は、青梅坂にある桐久保と称される小さな沢で、現在も沢には清らかな水が流れています。桐久保は標高約 280mの^{むらさめ}叢雨橋付近を源流とし、周辺の急斜面からの細流を集め、青梅線と青梅街道を横切って、天ヶ瀬町と滝ノ上町の境を市立美術館へ流れ下っています。桐久保の流域面積は約 56,300 m²で、絵図にある橋の標高は約 200m ですから、流域内の高度差は約 80m です。途中、山地内には都立青梅総合高校の「黒沢演習林」があり、時折、生徒たちが林業について学習している姿が見受けられます。「黒沢演習林」は、東京府立農林学校の演習林として、大正元（1912）年に開かれた、面積約 15ha の山林です。

（文責 角田清美）